

「西播磨山城復活プロジェクト」について

城 下 隆 広

一、はじめに

畿内と中国・四国地方を結ぶ重要な地点であった播磨地方では、戦国期に歴史に大きな影響を与える戦いが繰り広げられ、守護赤松氏以下播磨の武士、また播磨へと進出してきた武士達によって西播磨地域に一三〇を超える多くの山城が築かれた。

慶長二〇年（二六一五）、江戸幕府が「一国一城令」を大名達に命じたことで、その多くが廃城を迎えることになった。しかし、石垣などの基本的な構造は残り、五〇〇年以上の時を経て一部は風化しているものの、中世山城の趣を今に伝えている。

山城に関して、平成二七年（二〇一五）県立歴史博物館ひょうご歴史研究室が創設され、「赤松氏と山城」をテーマに調査研究が始まり、平成

二八年（二〇一六）兵庫県教育委員会と大手前大学の間で調査研究に関する協定が締結され、県文化財課の指導のもと上郡町主体で赤松居館跡の試掘調査がはじまった。こうした背景のもと、地元では市井の中世城郭研究家の木内内則氏ただのりが、約半世紀に亘り山城の研究を続けておられ、その膨大な研究成果が、この度の山城復活プロジェクトの軸となった。

令和二年（二〇二〇）から、「新型コロナウイルス」が世界的に蔓延し、我が国においても緊急事態宣言がたびたび発令され、人々の移動や活動が著しく制限された。そうした社会状況の中で、いわゆる「三密」を回避しつつ、少しでも西播磨への交流人口を増やして地域を元気にしたいとの思いから「西播磨山城復活プロジェクト構想」は始まった。

ターゲットは、主に山歩きや歴史好きの「元氣

な高齢者」、さらには将来的には訪日外国人を想定した。ツアー造成にあたっては、山城と周辺の歴史遺産（例えば、龍野、平福等の歴史的町並みや皆田和紙をはじめとする伝統文化体験など）を組み合わせた観光ツアーを想定し、域外からの誘客を目指した。あわせて地域住民にとって身近な歴史遺産である山城を主役にするこで、住民主体の地域活性化やシビックプライドの醸成、地域で培われてきた様々な文化の若年層への継承などの効果も期待できると考えた。

また中山間地での観光・交流人口の増加を目指すため、①認知度の向上、②インバウンドへの対応、③ネットワーク化による「点」ではなく「面」的な地域活性化といった課題を念頭に置いて取り組むこととした。

二、「西播磨山城復活プロジェクト」について

「西播磨山城復活プロジェクト」は、令和元年（二〇一九）に方針を定め、翌年（二〇二〇）から本格的に取り組みにあたり、数多くの山城から



図1 山城11（イレペン）

主要なものを選び「山城11（イレペン）」（図1）と銘打って、地域の魅力と合わせて発信することとした。

このプロジェクトの取り組みを「コンテンツ魅力向上」「上質ガイド育成」「アクセス利便性の改善」「情報発信」の四つの観点から紹介する。

（一）コンテンツ魅力向上

①「西播磨の山城へGO」モニターバスツアー
令和二年度（二〇二〇年度）から四年度にかけて、西播磨地域の歴史遺産として今に残る山城と

雰囲気のある町並み・宿場町（龍野、平福等）や伝統文化体験、食が楽しめる体験型ツアーの造成を目指して、募集型モニターバスツアーを運行。計三二回実施し、延べ三四四名の参加を得た。

しかし結果は、新型コロナによる外出抑制や天候等による中止、ツアー料金の自己負担の上昇などが重なり、想定した参加者は得られず、当初目指した民間によるツアー造成は、現在も完成していない。

但し、山城毎の特徴を考慮したガイドの方法、必要人数、留意点など、その後に活かせる多くの気づきを得ることができた。

② AR技術を活用した天守・建築物の再現

山城を身近に感じてもらうため天守、櫓、曲輪等を3DCGで再現し、スマホやタブレットで往時の姿を想像しながら山城を体感できるアプリ「西播磨の山城へGO」(図2)を制作した。管内各市町一城(感状山城、龍野古城、尼子山城、篠ノ丸城、楯岩城、白旗城、利神城)をラインナップし、手軽に山城の魅力に触れられることから評判

を呼び、令和五年度(二〇二三年度)末の利用者は、延べ約二六、〇〇〇名に達している。



図2 アプリ画面

③ 伝統文化体験メニューの魅力向上

地域の伝統文化を継承していくため、刀鍛冶、甲冑試着、和紙づくりなどの伝統文化や自然資源を生かした体験型メニュー(図3)を組み合わせて、山城と共に地域の魅力として発信している。二〇二五年大阪・関西万博に向けた取り組み



図3 桔梗隼光鍛刀場(ひょうごFPHP)

として、「ひょうごフィールドパビリオン」に認定され、海外への情報発信にも力を入れている。

(2) 上質ガイド育成

山城や地域資源を生かした観光・交流を維持発展させるためには、地元の「おもてなし」の心を醸成するガイドの育成が必要であった。このため地域住民で、地域のことを知り尽くした「地元スポーツガイド」と、その人脈と

来訪者のニーズに合わせた旅をアレンジする「広域ガイド」をガイドイメージとして、「西播磨上質ガイド養成講座」を実施。講座では、西播磨の山城の基礎知識、地域資源、



図4 ガイド育成研修

ガイドの心得の座学に加え、山城フィールドワークも実施した(図4)。また、一定のスキルを身につけた受講者がモニターバスツアーのガイドを担当するなど、成長サイクルが着実に機能する様工夫を行った。令和二年度(二〇二〇年度)から四年度までに四四名が講座を修了し、山城11(イレブン)全てに担当ガイドグループが整った。令和五年(二〇二三)三月に、グループリーダー会議で「西播磨山城ガイド協会」の設立が決定され、現在も継続的なグループ間の連携、研修、交流が行われている。

(3) 利便性等の改善

かつては交通の要衝に位置し麓まで見渡せた山城も、数百年後の今ではうっそうとした木々に覆われている。このため山城からの眺望を確保するため、視界を遮る樹木の伐採を行った。令和元年度(二〇一九年度)には上月城(佐用町)、令和二年度には城山城(たつの市)や楯岩城(太子町)などで眺望改善作業を実施した。

また、観光客が山城巡りを楽しめるよう、登山

口周辺の駐車場整備と案内標識設置も行った。

(4) 情報発信

①西播磨の山城専用サイトの開設

山城を紹介するウェブサイトを令和三年(二〇二二)三月に開設し、「赤松一族と播磨の山城」動画や、山城11(イレブン)を含む一三の山城の動画や見どころポイント、コースマップを掲載している。

②ロゴマーク、イメージキャラクターの作製

プロジェクトのイメージを県民と共有するため、令和二年度(二〇二一年度)にロゴマークを公募し、三〇一件の応募の中から選定した(図5)。また「西播磨の山城 ゆかりの武将のイメージキャラクターアイデア」を募集し、「山城三兄弟」のキャラクターを完成、令和三年度には道の駅や管内県立高校、山城ファンクラブによる投票により「紅葉丸」^{あきはるまる}、「夢葉丸」^{ゆめのはまる}、「月光丸」^{げっこうまる}と命名した(図6)。



図5 山城ロゴマーク

現在は、官民共同で実施しているグッズ開発・販売(例：ライনスタンプ、手ぬぐい、ポロシャツ、マグカップ、帽子、どら焼きなど)に活用している。

以上四つの取り組みを通じて、西播磨の山城や地域文化を国内外に広く発信し、観光客誘致と地域活性化を推進している。

三、活動の広がり、成果

「西播磨山城復活プロジェクト」での様々な取り組みを通じて、地域住民が主体となった活動が広がっている。特に「西播磨山城ガイド協会」による山城の魅力発信や誘客促進によって、地域住民の間で山城が「地域の宝」として見直され、地域活性化の源になっている。



図6 山城3兄弟

○「西播磨山城ガイド協会」の運営及び事業の展開
—活動の継続、自立—

三年間にわたるガイド養成講座の終了後、講座修了生により令和五年（二〇二三）三月一日にNPO法人姫路コンベンションサポートを事務局とする「西播磨山城ガイド協会」が設立され



図7 山城取り組み位置図

た。協会では、窓口となるウェブサイトを運営し、専任のガイドを配置することで、ツアー希望者とガイドを有料でマッチングさせるなど各山城ガイドの活動を支援している。

また、山城のファンを増やし、各地のガイド活動を継続させるため、各山城ガイドの会と連携し、令和五年度から「西播磨山城を巡るスタンプラリー」として、年間一〇回の山城ハイキングを企画・実施している。このイベントは、インスタグラムなどで注目を集め、毎回定員を超える応募が殺到するほどの人気イベントとなり、今では、参加者相互の交流だけでなく、参加者と地域住民のつながりを深める場にもなっている。

こうした西播磨地域での山城ブームを支える基盤が整うなか、山城を中心に地域の特性を生かした地域活性化に取り組んでいる四地域を紹介する。(図7)

(1) 利神城りかんじょうと「佐用山城ガイド協会」の挑戦—インバウンド、収益に向けた取り組み—(平成二九年(二〇一七)国指定史跡)

利神城は、国の史跡に指定され、町を挙げてその保存と整備が進められている。令和五年（二〇二三）からは本格的な整備プランが始まり、地域住民自らが利神城の価値を学び、次世代へと継承するための取り組みが積極的に行われている。

①ガイドツアーの取組み

利神城の魅力を広く伝える中心的役割を担っているのが「佐用山城ガイド協会」である。この協会は、利神城の史跡指定を機に、令和三年（二〇二一）一月に設立されたもので、現在、講座修了者を中心に一四人のガイドが所属している。

利神城は、これまで、石垣の崩落などによる危険箇所が多く、入山が禁止されていたが、現在はガイド同伴でのみ入山が許可され、専門ガイドによるツアーが実施されている。このツアーでは、雲海に浮かぶ姿から「雲突城」と称される利神城の魅力を存分に楽しむことができ、全国の山城ファンから注目を集めている。登山客数は年々増

加し、近年はツアー募集後すぐに満員となっている。（令和六年度は四七三人）。また、西播磨地域で列車（智頭急行平福駅）から一番近い山城であり、「いつかは行きたい山城」として親しまれている。

②インバウンド対応とガイドレベルの向上

佐用山城ガイド協会はインバウンド対応にも積極的に取り組んでいる。外国人観光客のため英語版のガイドマニュアルを作成し、ガイドにも月二回の英語レッスンをを行うなど、ガイドの専門性を高め、利神城の国際的な発信力を強化している。令和六年一二月には海外の旅行社二社のモニターツアーが決まっている。

③収益化に向けた取組み

佐用山城ガイド協会はボランティア活動にとどまらず、収益事業にも積極的に取り組んでいる。ツアーのガイド料を三〇〇〇円（資料・弁当付き）に設定し、利神城のオリジナルグッズ（Tシャツ、缶バッジなど）を販売して活動資金を確保し、継続的な運営体制を整えている。

これらの活動は、地域の歴史的財産である利神

城と山麓にある御殿屋敷跡を守りながら、その魅力を次世代へとつなげる重要な礎となっている。

(2) 感状山城の活動―地域への愛着、次世代への継承―(平成八年(一九九六)国指定史跡)

感状山城では、「感状山城ガイドの会」が活動をしており、現在一〇名のガイドが所属している。様々なガイドツアーやイベントに加え、ボランティアによる城の整備活動や子ども向けの体験事業などを行っており、地域住民から身近な歴史の場として親しまれている。

①山城の整備活動

感状山城の整備はガイドボランティアが主体となつて、山城周辺の樹木伐採、登山道の土砂除去など、歩きやすい登山道を整備・維持を行っている。中でも注目される活動が、前述のモニターバスツアーを利用したボランティア清掃であり、令和四年度(二〇二二年度)には、神戸三宮から感状山城へ向かう有料の清掃ツアー(三五〇〇円)が企画され、定員一三名が満席となる人気だった。

参加者たちは、落ち葉の除去や樹木の剪定、ロープ張り、標識の設置といった山城の環境整備に協力した。このような内外のボランティアの取り組みにより、感状山城は徐々に整備が進み、固定ファンの創出につながっている。

②子ども向け体験事業「戦国山城クッキング」

感状山城ガイドの会では、地域の子どもたちにも歴史への関心を持ってもらうため、体験イベント「戦国山城クッキング」を実施している。このイベントは、武士や庶民が戦時に食していたとされる「兵糧丸」^{ひょうりょうがん}、「芋がら縄」^{いもがらなわ}、「焼き味噌」の三品を調理体験するもので、地元の子どもたちにとつて戦国時代の食文化を知り、当時の生活に触れ、身近な地域の歴史を学ぶ、貴重な機会となっている。

(3) 皆田和紙保存会と上月城の取り組み―山城と体験活動の連携―

兵庫県佐用町の皆田地区には、江戸時代から続く伝統的な手漉き和紙「皆田和紙」があり、地域の歴史と文化を継承するための保存活動が行われている。また、織田・毛利による上月合戦の主戦

場となった上月城があり、皆田和紙保存会と連携した観光体験が提供されている。

①皆田和紙と上月城の観光連携

皆田和紙と上月城登山ツアーは、地元の伝統工芸と自然、歴史を満喫できる体験として兵庫県が取り組む「ひょうごフィールドパビリオン」に認定されている。このツアーでは、まず江戸時代から続く和紙づくりの技術や職人の手仕事を体験し地域の文化や歴史への理解を深め、その後、四季折々の自然を楽しみながら、上月城へ登山し戦国時代の歴史を体感することができる。

かつて皆田地区で広く作られていた皆田和紙は、戦後の工業化に伴い一時途絶えかけたが、地元職人や文化財保存団体の努力により復興され、技術と伝統が受け継がれている。今では、地域の貴重な文化財として保護されており、さらに、上月城との連携により観光誘致の目玉として注目され、地域活性化にも貢献している。皆田和紙保存会と上月城の連携した取り組みは、地域の歴史と伝統を次世代に継承するための重要な役割を果た

している。こうした功績により、保存会は、令和六年（二〇二四）に県の文化賞を受賞している。

(4) 「白旗城しろはたじょうと赤松手づくり鎧・冑」赤松地区村

づくり推進委員会の活動（平成八年（一九九六）国指定史跡）

南北朝時代の武将、赤松円心ゆかりの郷である上郡町赤松地区には、国の史跡に指定された「白旗城跡」がある。ここでは、地域住民が主体となって地域遺産「白旗城」を生かした地域の元気づくりに取り組んでいる。

①「落ちない城・白旗城」PRプロジェクト

人口減少や少子高齢化が進む中、平成二〇年（二〇〇八）に「赤松地区むらづくり推進委員会」が設立され、住民が主体となって、毎年一月二三日に「白旗城まつり」が開催されている。また、平成二八年からは上郡町や西播磨県民局とともに、難攻不落にちなんだ「落ちない城・白旗城」PRプロジェクトを展開している。合格祈願の「絵馬」の制作販売など、「白旗城」にちなんだ特産

品の開発にも力を注いでいる。

② 「赤松手づくり鎧・かぶとの会」

平成二六年(二〇一四)には地域住民による「赤松手づくり鎧・かぶとの会」が結成された。この会では、材料として厚紙や古布を使用し、価格に合わせて比較的手軽に作ることで、着付けも容易にできる鎧かぶとを製作している(図8)。地元では子や孫のために作る「マイ甲冑」が広まっている。

白旗城まつりの武者行列での披露を目指して、鎧かぶとづくり教室が毎年開催され、上郡町のふるさと納税の返礼品としても活用されている。さらに、二〇二五年大阪・関西万博の



図8 手づくり鎧・かぶとの会
(ひょうごFPHP)

「ひょうごフィールドパビリオン」の体験プログラムに認定され、様々なイベントに協力・出展している。手づくり鎧かぶとは、「白旗城」とともに地域の魅力発信だけでなく、住民の地域の誇り(シビックプライド)の醸成にも役だっている。

五、まとめ、今後の展開

(成果と今)

「西播磨山城復活プロジェクト」は、地域での自主的な活動が拡がり、観光客を呼び込むなど多くの成果が出ている。当初課題であった①「認知度の向上」は、キャラクターやアプリの制作、パンフレット、HPなどにより、一定の成果を上げている。②「インバウンドへの対応」は、各山城ガイドグループによる英語研修や、徐々にはあるが解説看板の多言語化が進められており、今後一層の拡充が求められる。③「ネットワーク化による面的な地域活性化」については、「西播磨山城ガイド協会」が、山城11(イレブン)を対象に専任ガイド付きツアーやイベントを開催し好評を

得ており、西播磨内外に多くの山城ファンを生んでいる。地元においても地域の宝として山城の認識が深まり、山道整備や来訪者案内への協力、地場産品の企画・販売など様々な地域の活性化に繋がっている。さらに、ガイドや観光イベントは若者から高齢者まで幅広い層に支持され、地域住民の地域への愛着や誇りの醸成にも寄与している。

最近の取り組みとして、西播磨ツーリズム振興協議会では、兵庫県立津ミュージアムでの「播磨の山城」特別展の開催（二〇二四年一月～三月）や全国規模のお城イベント「お城EXPO」や「全国山城サミット」等に参加し、内外に広くPRを行っている。また、約半世紀の研究の集大成として、現存しない山城をわかりやすく解説した木内内則氏著の「中世播磨二五〇の山城」の発行・販売や、地域振興や観光施策を担う自治体職員向けに山城講演会を開催し、幅広い層に向けた「西播磨の山城」の魅力発信に取り組んでいる。

（これからの課題）

観光面では、当初目指していた民間事業者によ

る観光ルート造成は、未だ実現していないが、今後、県内で知名度の高い姫路城や竹田城などと連携した広域観光ルートを視野に入れて取り組んでいきたい。また、ボランティアガイドの世代交代について、専門知識や地域文化を兼ね備えた後継ガイド養成が急務となっている。併せて、ハイキングツアーの有料化やグッズ販売の拡充といった継続のための収益化も進める必要がある。

地域活性化の観点からは、若者への地域文化の継承を一層進めたい。例えば、有年山城では高校生が制作した音声ガイドが設置されており、こうした若年層が主体的に関与できる仕組みを拡げていきたい。

観光・交流人口の増加、地域の活性化・元気づくりには、本プロジェクトが持つ可能性は大きい。西播磨の歴史を通じて、過去と現代、現代と現代の人々が交流し、新しい繋がりが生まれ、地域に元気をもたらしていく。そんな西播磨地域を胸に抱きながら、今後も挑戦を続けていきたい。